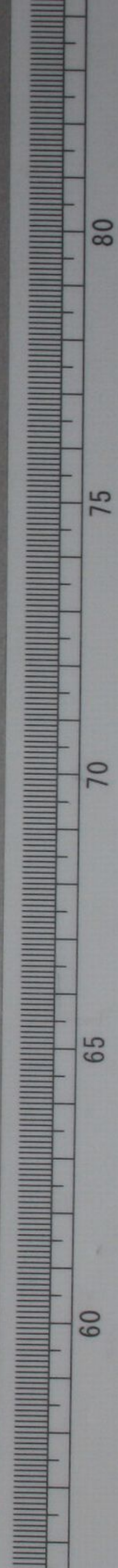




中村俊定文庫
文庫 18
164



其前七回志追善集

半世亦一冊

二乃記札

全

中村俊定稿より借本

何故うの拾遺也とむ櫃年

巻如あしちるらんれとくひ

也とくしちりくならぬ五言を

虫情あゆむとくわつや

鳥丸波宮をよの菊とあはなふ

よれ下とありしハあまの

是ハ又明十酒好字のこ



香子河原の家は海と云ふ
ものゝ其の成はれ所
に於て一とて弟の成はれ所

中村俊定

治徳



亡友其角七回忌

梅老如其人とくハケヤ亡
其子乃昔や初一より角田川
名や無くハ流て原ハ其の関
其子乃昔や初一より角田川
黒乃乃の流る如屏風也玉柳
石乃若の流るて久ハ其燕ハ

才磨 伴自 何中 岸紫 李天 文十



去々梅乃裏了と跡は筆の爰
 此面もあ故の彼もよ七車
 引露や七々みて、徳ハ著
 今もすく月ハあすく乃亦百外
 去々玉ハ香炉乃上の栲う香
 非 三 惟 溪 尾 者 杖 甘 泉

其前
 一ふこの元より何と
 ともくんせり多とハ
 いふ面はけ何と云

名乃は又彫す初すといつちて七
 未ハ

国くくを根くつて落乃暮
 南都 左柳

一用忌ハは天毎乃交りて必ず
 短き心き一を撰すこれハ
 面上の響もめて香艸の一句
 ことば流る光りもや
 去ありの月味言者より
 七回の傳りなせむハけ去り
 撰者乃筆をさくくもや

梅乃月出のやうは乃ハ
 音子を去々乃を也りし
 風姿を去々はるりとかう
 決々

難の難といふ句をひめて

關か走ろし 是の難乃郭一公 雪江

つかりく 乃おつりく あり

口このふまふ車や 未平紅 高柱

分もそ乃は岸さらくや 立きく 毫十

正徳三己二月廿九日七甲

七周遠志之干時 予 踏ニ

新路雪難 終月 飯井陽

懐旧集許 多門人持之

拾其残 聊述鄙意

菟休板

粘敷乃落てそあしき梅 湖十

関の灯もふま苗代乃雨 堤亭

都道乃りお行器賣さく 園女

呑んで腹ゆるめさくそいせ 毫十

香りて我をさかす月の 堤亭

塩木よふもさくそいせ 湖十

擋櫛や三粒乃青をさくそいせ 毫十

けりよふもさくそいせ 堤亭

男むしとさくそいせ 湖十

半面乃黄く柱あやうれ 宝晋女

蘇所くく夜もあつて風薫る
 堤亭
 糸合船中 田舎のつらさ
 湖十
 和衣乃浦子志つらさくつ花の口
 青流
 美研の何をいへるや
 亀十
 魚釣の腮乃離るいっなり
 湖十
 坊主小云東、庵室一入
 堤亭
 曾如月揺るめさちめや
 亀十
 織造しるをさくしんさく
 湖十
 玉ひらく人をうぶ粉乃落る
 堤亭
 月たさくも大名を知る
 亀十

舟の舟一馴るく六十と八幅
 湖十
 茶くちの滝乃もく境界
 堤亭
 ひろくも雨をちりり杜の
 亀十
 けりさみしるさかす森
 湖十
 乙極つんてさうめんそ誰か
 堤亭
 弾馬しくカシ乃つらき考
 亀十
 松の芭杉乃斬も磯ちりし
 湖十
 何よりて色の脈あるらん
 堤亭
 あさり都々とみるあふ流月
 堵岩
 一言つても新乃傍草
 湖十

鐘乃綱笠色やけき子更ふち
 けんこ刻むよよ光とや
 放埒も上ト毛ゆりて雪乃窓
 機嫌な時、纏うて文通
 谷ゆりかこ見え家具の疵
 雪乃草よりみなるるま

堤亭
 亀十
 湖十
 提亭
 沾徳
 花十

苗よりそとつる松杉をに
 露を乃雪為梅もやけり
 志はいつちとらやうしやく
 一も人の作は縁と海りて

信守てたる深川乃いれを
 みまほ一めてあまを
 花むめをいつせの木をり
 たぬ一何い

ま
 吟

庚月十八日永代八幡堂
 まりりこを流木もとうて
 たのこを流し

尾巻千

春

あぶらうを馬乃穴やゆふさ
 冬のつゆふくせうれて木の芽か

千泉
 南浦

のり鐘をやくい樞やかたよる
大石のとくかまるとやあまを
蝶床やまのめいさまで清光の人
吾妻の草もきれてやに中の有所
けあこぬをよすあもゆい
雨乃考の道やうかみ夜乃梅
川乃道いぬも錢買柳うね

暮春

夕空やむかきき花と雨蛙
て乃時のありしさを藤の敷

亀十
如梁
十凡
文芥
葉砂
巷十
堤亭

吟柱
巳十

あまらや花のゆき平不三南
うくひす乃色を情一蒼外
随く羊のめをえんは序外
清文庫乃名も蟹を梅の谷

朔星の網よ玉奪の履を

八月九日乃夜まつり

もよこりまら海の家網を乃雁

雁字

天一粒かくく厚乃海うりさ
策一を雁字も名跡外

富良
月水
堤亭
青流

湖十

立永
亀十

新雪

城乃装自立よき中り亭下坊 堤亭

洞庭月

秋高子此志亦部書くり子 清流

一日長あ花

極つゝ鐘賣しぬ日ハ花乃る云 沽德

お音子う鐘ひらりと云

元日乃口号と云

半面美人

百句下畧

春乃月琴子物くけりぬ 其角

梅くこの中き霧のけりぬ 湖十

あ神子ほりけりぬ 杵子

細干ふちく入乃百足 百里

見けりせし梁のまきぬ 仙窟

軒乃中をさりと 専吟

あ瓜のうらさもうささ 渭水

小陸道中石蕨の掛 沽德

親の子乃懐ひぬき 晒米 沽例

浄えけりぬ 巴人

昔より日向乃太鞍をすく
 のちこの沙魚より重し十文
 舟者をむ火り隠す花を
 人こそ志しぬ形乃月
 喚てさう造お所乃 鮫屑
 取く津の文字をさるる鴛鴦
 川作乃流きを引て下世の奥
 ねや文ぬくく 廻箸の音
 前髪を男伊達に似せ下都
 ありや 笠を杖の言名
 車輪
 丁東
 朝叟
 白柳
 序令
 南盛
 午寂
 心水
 指馬
 花億

俺は彫く三輪素麺乃やう放し
 入日る巻の巻りよむなる
 今石乃捲りくこのて街アを方
 余所一月の月をさるる門服の舟
 青流
 景帝
 大町
 堤亭

其

損徳乃中へ高こむおき法
 捕の鏡ぬる所と何列も
 音子乃信伝より
 如是強くふるびの勤く牡丹外
 春梅やもの子隠れて隅田川
 千江
 李洞
 南浦

ひとりきり指を折りたり夕日新
 佛乳のよみ鉢巻むすし草蒲水
 髪も切らば杖さのりや橋の
 吹消て蚊乃那の朝々
 指花やう法の素くかへりまを
 逢つて言ひて面自し車百京中
 寐て見れり大子男むくよす

専化
 花拙
 湖十
 鳥白
 堤亭
 亀十
 堵岩

甚角緒讚乃屏乃千泉子
 所持古千子安ら

寒山乃心をともあひて

指は乃几巾をかむや玉箒
 若笠子てあゝのりま婦如
 鶏乃妙子まらゝゝく距く邪
 物ありまゝ水ゝこかきて花

倭司馬温公吉吉(吉吉)

草狩や鼻乃あきなるあかまの
 ちつとけや獨坐はまをせらるる者
 狩り忘らんすの乃まにまはる戸亦
 初雪か一蒼の枝枝の小さ念

雪子画

夕涼

けりあやゆきのあまくりき河より
奈良橋乃具山石より日を流
里がちよ如く常乃たひの道
自雨や晴ききあつき勸修寺
栢梅やあつれ人乃はゆわ
石鑿のよほほふらん荊のむ
あつれのかた乃押のきあつ

謹佛

卯乃花乃虚つきひくきけし

穉

吟柱
露柱
谷十
故一
堤亭
大使
湖十

清流

牛乃尾や忘よすせ外む落
川隈や江戸の硯乃たつひ
かつりよみあをて来子おあみ
葉餅の箔をかぢころ月元久

清流
泊竹
諸自
千泉

ありし秋乃夕つるふあて
る山よあつりし
あつれあつ

けり秋乃あつれあつれ所一石山の
あつれあつれ山や一皮下りあ
あつれの麻隣をこのあつれ旅籠外
あつれあつれあつれあつれあつれあ

鋤立
湖十
堤亭
銀泉

稗を伏す乃こかし和

素丸

昔を乃流をいひく

昔も香も袖あめておる秋乃中

僧心夕

て乃麻の香も遠はりる弥席

文流

乾くもそ憚しも橋も秋の神

大使

名は月やかみり流乃ぬの菊

鳥白

物乃ハ籠のちうくの干菊の存

専化

芦乃粒のうらかく比く言まひ

卷十

待くしてそ日回向乃木槿外

亀十

細乃裾くはせハ草星乃伽

堵岩

送火や七母てまやす太夫買

好竹

手もも枝も信もも夕やんま

雁砂

遠のけや月乃落のこたつこ

病柱

鶯翁や下駈て夕伊流ういの元

牛止

角おまア乃粒わけや海を家

藤尺

二星

智恵乃輪のおを越へる星の床

素丸

鳴りや指乃ぬくくの朝胡

胡十

元山の秋のこりつくさし

園女

星合やよりかあハ三輪の赤

我兄

待心乃郎

中節

十山

お成持の月

坊をきくも随ふとも 有角

待子心はちの月

長 有角

とぬらしたるに

みよの月

あつたをいへり

おれぬらしたるに

みよの月

あつたをいへり

有角 有角

又寺し雪子あつた

有角

使者ゆり

孰

切膚くく只今敷る初音小
 志を古いやそ海の松と女房
 とも雪やまればあつる雪履元
 以てひらきも身も尋る夢うな
 肌付ハ不二乃根摺の雪見小
 雄更を昇てはむく時雨外
 翁やま桑のこを抱て寐
 多うけの浪まごみ落て櫓乃霜
 三沙乃迷もむりく雪交交
 巴人 堤亭 靖岩 亀十 巷千 徐凉 故一 大使 千江

炭くや東心面 膝のし能
 戸守やけふ九重みかつる巷
 七海くく乃難魚一そく何人
 盤銅を捻れうもつ氷の舟
 下せ乃手をひらけり冬木立
 名の志まを膝^膝わくくわくま
 かけ菜のうま人もあき肝場以
 止てそくまもつるや
 不きまをうつ沈黙もるふ石蔭の巷
 青流 湖十 烏自 冬志 病柱 諾自 一漁 夫松^松

笑佛讀ス

手呵つここあゆみさるるの道 園女

始て子子よをりしつる秋の

余真子両三言を述つる

心ひきけり

錢秋序

竹極く登り嵐や巾子糊 雨橋

ひより石菰の如鏡はむ 湖十

栲扇乃上り古銭は位 浮生

茶のを遠くあつきゆく 蟬話

近魁へ去りて唐大鼓一重 節士

浩乃メホりつる繁文結 此糸

提刀のそ 魏をさうく十三夜 啟史

私領中へ入るお綱を穿 素白

斤てき子は吹あけの和巾敷 保枝

見〜〜〜人〜〜〜 度人

暖いまよひのまよひ蓮は何より 山名

久〜〜〜雨を忘るる竹 執筆

柳か伊勢や薩摩のあし談わ 湖十

舟入ぬちまよひく盆乃月 浮生

く水、香鋪一葉あゆく 蟬話

雨橋

駒下駄の不足も月の影うち
 捨合して逸つらぬし
 ありあきこの院中一豆磨賣
 箱乃ほり隈笠の中一
 阿のいて花子對する大仏所
 四糸見捨く〜凡中は手とる
 小口〜段をぬきちまゝ直り
 道こ〜海〜かき〜ま〜春
 摺子下肩子すきと 甲斐流
 根々大もろるる麻を搦く

二

此糸
 第士
 素白
 保枝
 湖十
 蝉話
 浮生
 山夕
 保枝
 湖十

横つぐ王子を箱あ〜〜きとハ
 新の河〜た〜病おちゆる
 長鋤子浮吹 庵の窓へ来ぬ
 磁石くるいぬ門ハ十刹
 枕味唱ハ智乃い痛がり粟〜
 綿〜を〜あ〜ぬ〜ち〜浮〜舟
 今時乃月を志るあ〜い〜密者あ〜
 ハ十の目〜と〜む〜り〜乃〜あ〜
 だも乃実のあ〜も〜ぬ〜ち〜よ〜も〜喉〜てり
 風つ〜し 中肉の内

此糸
 素白
 第士
 保枝
 湖十
 蝉話
 浮生
 山夕
 保枝
 湖十

川者の際おく無小破れ香月
寝おろしたる雪双さうた
現人を一夜梳乃封してハ
お籠りしきり給馬子振袖
こき掃のあ速も利て白草走
眉あひ眠く栗木へあつ
つる時乃蟻ハ硯と一屯の沈
いさましくて青飯乃膝

素白 節士 湖十 雨指 此奈 蟬語 山夕 保枝

遙二むしつらすりの冬一月
湖十子もの教んとて

いさくほを時あはあきく
そき袖さむき巻のめ仙
お乃つゝ豆腐の泡乃涌立ろ
るひあちまらつきの声
菽乃海人もすく跡乃月
紐もそめ守露の吹く

其角 湖十 謂小 露柱 古珍 何港

小樽崎白雲一語はゆく此乃ち
好め人々花巻月夕の白多
中あも不時の落巻も感し
いさくしつらすりてあは

ふくししおの徳孝心百理
かよ鴨さうして子踏き登
しりの香匂しそをのり鬼の
踊りはあらんともたがふて
ふひもろけらんその聖あき
へりつ子みれば惜む
初老の坂ありて

日言ゆり

淡雪乃の踏ききこり松をば
冬の日へあもすこし一足吾生
鴨さむしとさうり多の羽はす
湖十
粟葉
止月

かきつたこの根もゆくし冬は
の咲ハすこ何くはきぬ句は口
はきとてそ不時乃海も公智の比
死鳥乃あまはひ一き衣紋さ
心夕
小燕
万江
一尾

戸塚氏又あうりて下せきり

耳あのことせしむ

空同初雁

色もれてこりの初瀬乃踏く神
お紫

對菊情秋

菊咲きく子ちひを括る杖外
今

郭一公

杉乃松の何れも志なき時
雨のきき聲より墓なる

堤亭

湖十

新雪

雪乃老ゆくまゆの雪

青峩

奇沙恋

志乃松の何れも志なき時
雨のきき聲より墓なる

堤亭

湖十

江湖抱雨十年燈を
あまきも雲のまよひの砂
糸一團よきくふ一冊我
多ゆふ時まへ人乃松を
之も知るにあはれ誰の
為りういたみおのこくま
た先々集平一ありいま

彫工乃ゆち一語をいつめ
この春はたぬ事ありそ
むうをふえのれ

庵崎軒家

青流夜

吉田宇右衛門板

